Forbes JAPAN

2021
10
No.86
定価1200円

米副大統領が語る「インクルーシブな起業支援を！」

カマラ・ハリス（アメリカ合衆国副大統領）

特集◎
武器としての「投資思考」

必読！ Fintech 50

INCLUSIVE CAPITALISM

LIFE LESSON

PART 3

人間の可能性に挑む
生き方を変える思考法

LEGENDS RAISE A NEW GENERATION

MPower Partners キャシー松井・村上由美子・関 美和

人生経験を投資に生かす「私たちが両親の背中から学んだこと」

金融界のレジェンドたちが、立ち上げた話題のベンチャーキャピタル、MPower Partners。グローバルを舞台に道を切り拓いてきた3人の目に映る次のミッションとは。

text by Hiroko Nakata | illustration by Andrea Manzati
中田浩子 = 文　アンドレア・マンザッティ = イラストレーション

話題を呼ぶ新設VCがある。ゼネラル・パートナーとしてファンドを立ち上げたのは、ゴールドマン・サックス証券の日本副会長兼チーフ日本株ストラテジストを務めていたキャシー松井、OECD（経済協力開発機構）東京センター所長だった村上由美子、そして『FACTFULLNESS』などのベストセラー書を翻訳した関 美和だ。

3人ともキャリアで大きな成功を収めているにもかかわらず、なぜいまVCなのか。その理由は後述する3人に共通する「生い立ち」にあるかもしれない。彼女たちは投資家になるべくして、ようやくスタートラインに立ったと言えるのだ。

取材のなかで松井は、自身と同じ米国カリフォルニア州出身のカマラ・ハリス副大統領が、20年11月の選挙で就任が決まった直後のスピーチで「While I may be the first woman in this office, I will not be the last.（私はホワイトハウスで就任する初めての女性かもしれませんが、最後の女性ではないでしょう）」と述べたフレーズを挙げ、MPower Partnersを設立した3人の思いも同じだと語った。

「日本で女性が初めて起業したESG重視型VC。私たちが最後ではなく、これからもっと多様なベンチャーキャピタリストが日本に生まれてくることを期待している」

3人の新たな挑戦の根底にあった一つ目は、従前の経営や組織を大きく変えられない日本産業界への危機意識だ。

「1990年代初頭にバブルが崩壊するまでは、右肩上がりのマクロ経済を背景に、経営陣の同質性が高い会社でもかまわなかった」（松井）。ところが日本経済が低成長期を迎えデフレに陥った局面では、従来通りの年功序列制度、ダイバーシティに欠けた労働力、固定化された組織のなかでは、新しいアイデアやイノベーションは出てこない。時代の変化に対応した体制をつくらないと、少子高齢化が進み負債大国の日本には産業競争力がなくなる。

スタートアップに投資するVCを設立した理由が、ここにある。松井は30年間にわたり、主にゴールドマン・サックス証券で日本株ストラテジストとして活躍してきた。日本におよそ4,000社ある上場企業には改善の余地がある。しかし、「確立された組織を大きく変えていくのはかなり難しいという実感」をもったと松井は言う。そこで、柔軟性をもち、決断が早く、さらに変革を起こしうるイノベーションを手がけている若い起業家たちにESGの考え方を実装することで、グローバル市場にも耐えうる企業体にしていく。それが彼女たちの狙いだったのだ。

幸いなことに、大企業に一生勤めるのではなくスタートアップに挑戦する若者は最近増えている。もちろん英語やコミュニケーションの壁がまだあるが、海外投資家も積極的になってきており、最近はスタートアップの資金調達の平均3分の1を海外投資家からの資金が占めるまでになっているという話もある。「掘れば面白い宝物があると思っている。日本のスタートアップを海外に紹介していけると思う」（松井）

ESGの本質を投資を通して伝える

世界のESG投資額を集計する国際団体GSIA（Global Sustainable Investment Alliance）によると、2018年から20年までの2年間で世界全体のESG投資額は15.1%増加し、35兆3,010億

KATHY MATSUI

キャシー松井◎1965年生まれ。ハーバード大学、ジョンズホプキンズ大学院卒。ゴールドマン・サックス証券会社元日本副会長および、日本株ストラテジスト。ウーマノミクスの提唱者として知られ、2007年には、ウォールストリートジャーナルで「10 Women to Watch in Asia」に選ばれた。

> 大きな社会問題を解決するソリューションはビジネス・チャンスがあると見ている（関）

mPOWER

2021年5月に設立された、ESG重視型グローバル・ベンチャーキャピタル・ファンド。成長段階の社会的課題をテクノロジーの力で解決しようとする、国際的な拡大を目指すスタートアップを支援する。1号案件として、保育テックのユニファ、2号案件としウェブサイトなどの他言語化ソリューションを展開するWovnテクノロジーズを発表している。

米ドルになった。ESGは以前、上場企業のみに問われていた投資判断の基準だった。「いまは未公開企業でもガバナンス、ダイバーシティが問われる時代になっている。当然上場すると投資家から厳しい目で見られるため、早い段階での本質的な対応やマインドシフトが必要だ」と松井は強調する。

村上は、日本でもESG投資に注目が集まっている現状は肯定的に評価しながらも、ソーシャル・インパクト型投資と混同されやすく企業にとってコスト要因と見られることに異議を唱え、「ESGは企業に競争優位をもたらす要因だと考えている。ESGを実装することで、その会社の企業価値を高めることができるということを今回のファンドを通して実証しようと思っている」と語った。村上もOECD以前、主にニューヨークやロンドンのゴールドマン・サックス証券のマネジメント・ディレクターとして約20年間勤務した金融の専門家だ。

設立時から大口の機関投資家として名乗りを上げた第一生命保険、SOMPOホールディングス、三井住友トラスト・ホールディングスはもともとESGを投資戦略の中心に据えている。今回3社は資金を投入して終わるのではなく、VCのESG重視型投資の方法についてMPower Partnersと意見交換をすることでともに学ぶ機会にしたいと考えているという。その他の投資家からも資金は集まりつつあり、現在目標とするファンドの規模160億円に向けて資金調達は「順調に行っている」（村上）という。

同時に、スタートアップに対するESGの評価手法に関しては手探りの段階だともいう。上場企業がのESGのフレームワークでスタートアップに使えそうなものを抽出しているが、必要なフレームワークは企業、セクター、投資ステージによっても違うため、ファンド側から押し付けることはしないという。

投資先については21年8月上旬時点で2号案件まで決まっている。6月に発表した1号案件は保育テックのユニファ。テクノロジーを活用して保育や子育てに関する社会課題を解決するスタートアップだ。7月に発表した2号案件はWovn（ウォーブン）テクノロジーズ。多国籍企業におけるマイノリティ言語の社員や顧客のためにインクルーシブなプラットフォームを開発している。

MPower Partnersはそのほかにもメンタルヘルスを含むヘルスケア、フィンテック、DX、循環経済環境などの分野のスタートアップに注目しており、とくに生産性向上につながるSaaSはグローバル市場に向けて将来性が高いと見ている。「大きな社会問

YUMIKO MURAKAMI

村上由美子◎1965年、島根県生まれ。上智大学、スタンフォード大学院、ハーバード大学院卒。ニューヨークおよびロンドンのゴールドマン・サックス証券のマネジメント・ディレクターなどを経て、2013年、OECD東京センター所長に就任。内閣府、経産省、外務省など多くの審議会で委員を歴任した。

> 自分たちは
> この年齢であらゆる
> 社会的な問題を経験
> してきている。
> 日本にいるほかの
> VC投資家と違う
> 経験や視点で
> 差別化できると思う
> （松井）

MIWA SEKI

関 美和◎1965年生まれ。慶応義塾大学、ハーバード大学院卒。モルガン・スタンレー投資銀行などを経て、クレイ・フィンレイ投資顧問東京支店長。退職後『FACTFULNESS』『ゼロ・トゥ・ワン 君はゼロから何を生み出せるか』などヒット作を翻訳。ベビーシッター会社メイコーポレーションを立ち上げ、売却した経験も。

題を解決するソリューションはビジネス・チャンスがあると見ている」と関は言う。

「投資思考」を築いた人生観

こうした目利き力は、ファンドを立ち上げた3人が金融業界で長年働いた経験によるところが大きい。先述の松井に加え、関は翻訳家になる以前、モルガン・スタンレー投資銀行部門を経てクレイ・フィンレイ投資顧問元東京支店長を務めていた。村上も外資系金融機関の勤務が長い。「私は金融機関で20年、国際機関で8年勤めてきた。そこでの経験・知見をうまく生かせるプラットフォームだと思っている」と村上は言う。「ある意味、いろんな経験をしてきたことがファンドというかたちで次のキャリアにつながったと自分では感じている」。

ロンドン・ビジネススクール教授のリンダ・グラットンが『LIFE SHIFT』によって広めた「人生100年時代」という概念に触れながら、松井は「リタイアメント（退職）」という言葉より「リワイヤメント（より長く働くために心の配線をかけ直す）」という言葉が好きだと話す。そして、長年勤めた会社を退職して新しい事業を始めたのは、起業家である親の背中を見て育ってきたことも大きいという。

以前から友人関係にあったMPower Partnersの3人には、共通点が多くある。ともに同じ1965年の同じ月に生まれ、米国ハーバード大学で学び、ワーキングマザーでありながら、数少ない女性の金融専門家である。それだけではなく、ともに起業家の娘でもある。関の福岡県の実家はチロルチョコを生んだ松尾製菓。島根県出身の村上の母親は48歳まで専業主婦として5人の子どもを育てた後、ドラッグストアを起業し山陰地方最大のチェーンストア「ウェルネス」として拡大させた。松井の両親は奈良県出身で、カリフォルニア州に移住して花農園を起業し、世界最大の蘭の生産量を誇るまでに事業を成長させた。

キャシー松井は1999年に「ウーマノミクス」の概念を提唱し、日本が人口減少していくなかで女性就労は経済成長の重要な鍵となると主張した。この概念は後に日本政府の女性活躍推進と経済成長戦略に影響を与えた。一方、世界経済フォーラムによると、日本のジェンダーギャップ指数はいまだ156カ国中120位であり、先進国で最低のレベル。

「アントレプレナーというとかっこいいけれど、その半面、親が苦労してきたのも見てきたし、簡単なことではない。サポートもたくさん必要だ。それが、大企業で勤めてきた後に残りの人生を自分で起業してみよう、そしてほかの起業家を支援しよう、という考えにつながったのかもしれない」と松井は話す。

3人はVCとして起業家支援を目指すことになった。その投資家としての思考は、リスクをとって挑戦することだけではなく、未来を育てることを意味しているのかもしれない。最後に松井はこれからの意気込みについて、生活者としての経験から身につけた「思考」を交え、このように結んだ。

「自分たちはこの年齢であらゆる社会的な問題を経験してきている。マイノリティとしての苦労、子育てや親の介護――ベンチャー投資経験は浅いけれど、日本にいるほかのVC投資家と違う経験や視点で差別化できるかなと思う」F